

論 文

広島県三次市吉舎方言における数量副詞語彙の体系と動態

The system and change of the quantity adverbs in the Kisa, Hiroshima dialect

岩城 裕之 (高知大学教育学部)

IWAKI Hiroyuki

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The following three aspects were revealed when we compared the vocabulary that expressed a large quantity and that which expressed a small quantity in Kisa dialect:

1. We found that there were more words for expressing a large quantity than those for expressing a small quantity.
2. The words for expressing a large quantity have been systemized into two types-- one for the quantitative aspect and the other, for the qualitative aspect. The words for expressing a small quantity on the one hand, have been systemized for the exclusive use in expressing the quantitative aspect.
3. Considering these aspects together, we are led to believe that the local people have perceived large quantities in many ways and have expressed them accordingly.

Furthermore, we compared the information on words that expressed quantity, with that for those given in "Linguistic Atlas of the Chugoku region". Our results revealed the two aspects given below:

4. The linguistic forms which are distributed from the area extending from Kisa Town to its east, showed the tendency of disappearing.
5. The words which are distributed in the vicinity of Hiroshima City, the prefectural seat, came to be used actively to this day.

The words which expressed extreme degrees, came to lose their value as they were being used, bringing about modifications at times. Even though we cannot conclude that this phenomenon is occurring in the said region, it is conceivable that transformations are happening in the vocabulary of its quantity adverbs, as influenced by the changes in Hiroshima City.

I. はじめに

現在進めている中国地方の方言分布動態の調査「中国地方方言における伝播の整流と偏流」（科学研究費補助金 基盤研究(C) 25370523）では、関西と九州の中間に位置し、西日本の言語伝播の通路となる位置にある中国地方の方言において、関西で起こり、中国地方にもおこると思われる変化がみられず、古い姿を留めるという現象について考察を行っている。その端緒として、山間部中国道における広域の方言分布状況と方言伝播の関係を総括的に記述することを目標とするが、本論文では広島県中部に位置する三次市方言の数量副詞語彙を取り上げる。

まず、当該地域の数量副詞語彙を取り上げ、その内部構造を明らかにすることで、これまであまり報告のない広島県中部の数量副詞語彙の体系を明らかにする。

次に、昭和30年代の調査を主とする『中国地方五県言語地図』との比較を通じ、約50年の分布の変化を考えることで、広島県中部における方言の動態を考察したい。

II. 調査の概要



調査地点は広島県三次市吉舎町(きさちょう)である。三次市の南東部に位置し、2004年4月1日に三次市に合併するまでは双三郡吉舎町であった。町内を馬洗川が北上し、三次と福山を結ぶJR福塩線、国道などが走る。人口は約5000人。

主な産業は農業であるが、デニム生地を生産する工場もある。

調査は2015年1月24日に、話者を紹介して下さった調査協力者の方の吉舎町内の自宅で実施した。数量副詞と程度副詞を併せて調査した。したがって、数量が「多いこと」「少ないこと」、割合が「全部」「大きいこと」、「ちょうどであったこと」、程度が「大きいこと」「小さいこと」という枠組みを示し、これらを表す語にどのような

ものがあるかを思い出し、教示してもらった。なお、あげられた語について、その語の意味や新古、共通語意識などについて筆者が確認を行った。

話者は吉舎町生まれの女性3名である。調査時年齢はそれぞれ、85歳、82歳、75歳であった。

調査時間は約1時間30分である。

III. 吉舎方言の数量副詞一覧

数量を表す副詞語彙は、数量が多いか少ないかを表す数量の体系と、全部なのかほとんどなのかといった、割合の体系の二種からなる。本論文では、『中国地方五県言語地図』との比較を行うため、数量の体系を扱うこととした。

以下、数量が多いことと少ないことのそれぞれのカテゴリーで得られた語と、その説明、使用文や教示文を示す。なお、話者の話した教示文や使用文例は、○のあとにカタカナで表記し、()に共通語訳を付した。筆者が補足した事項は{ }で示した。なお、アクセントは表記していない。●のあとには話者の説明をまとめたものを共通語で示した。

また一つ一つの語の意味について、筆者が確認した事柄について、適宜解説を加えた。

ア 数量「多」をあらわす語

①ギョーサン

○ギョーサン フットル。({雨が} 多く降っている。)

○ギョーサン オッチャッタ デヨ。タマゲタ デヨ。

({人が} たくさんいらっしやったよ。驚いたよ。)

当該地域でよく使われる語であり、対象に制限のない抽象度の高い語である。

②ヨケー

③ヨーケ

●ヨケーの強調

「ヨーケ」「ヨケー」もよく使われる。よく似た語形であるが、話者の意識として「ヨーケ」は「ヨケー」を強調し、若干数量が多いことを意味すると意識されている。

④エット

○カキヤー エット ナランカッタ。チートシカ トレンカッタ。(柿はたくさんできなかった。少ししかとれなかった。)

「エット」も抽象度が高く、よく使われる語である。使用文例のように、「エット」と「チート」が対照的な意味で用いられており、少ないことを表し、抽象度の高い「チート」と対になり、「エット」は多いことを表し、対象物に制限のない抽象度の高い語であるこ

とがわかる。

⑤イッパイ

○イッピー タベタ。(たくさん食べた。)

使用文例では「イッピー」という形で出現するが、語だけを発音してもらおうと「イッパイ」という形で出現する。例文は食の量について述べているが、「いっぱい人がいる」などでも使用でき、抽象度の高い語である。

⑥タクサン

○チーター ヨソイキナ ヨ。(「タクサンという語は」少しはよそ行きの「ことばだ」よ。)

●共通語という意識

数量が多いことを表す共通語形が「タクサン」である。この語もまた抽象度の高い語である。ただ、共通語として認識されているせいか、あまり使わないようである。○ツカウナー ツカウ ヨ。(使うといえば使うよ。)のように、積極的に使用する語というわけではないようだ。

⑦タイソー

○キノコガ タイソー アッタ ヨ。(きのこがたくさんあったよ。)

○クリョー タイソー ヒロータ ヨ。(栗をたくさん拾ったよ。)

使用文では物がとれた例であるが、「タイソー マッタ。(たくさん待った。)」などのように時間量などにも使用でき、抽象度の高い語である。また、共通語の「タイソー アツイ」のような、純粋程度の副詞としての用法を確認したところ、このような使い方はできないということであった。

以上①から⑦の語は抽象度の高い数量副詞語彙であったが、以下、対象物に制限がある、換言すれば使用できる文脈に制限のある語になる。

⑧タラフク

○ダイタイ タベタトキジャ ネ。(「使うのは」だいたい食べたときだね。)

●満腹の時

話者の教示にあるように、「タラフク」は腹一杯になるほど食べた場合に使用され、「人がたくさんいた」「何かがたくさんとれた」といった場合には使用されない。つまり、飲食物の量を指すという対象物の制限(文脈制限と言い換えても良い)がある語である。

⑨ヤマホド

○ヤマノヨーニ アル。(山のようにある「という意味」。)

「山のように」ということから、山のように積み上げられる物に使う。「水がヤマホド流れている」といった用法は不適である。

次に、③「ヨーケ」と同様、「エツト」などよりもさらに多量を表す語として「バクダイ」がある。

⑩バクダイ

○バクダイ ハナガ サイトッタ ヨ。(たくさん花が咲いていたよ。)

○モノガ アッタトキジャ ネ。(物「バクダイを使うのは」があったときだね。)

のように、数量に使われるのであるが、

○チート オイーカモ ワカラン。(「他のタクサンを表す語よりも」少し多い「量を表す」かもしれない。)にみられるように、若干誇張した言い方としてとらえられているようである。

さらに、若者がよく使うという教示もある。

○ワカモノニ オイーデス ヨ。(「バクダイを使うのは」若者が多いですよ。)

最後に、⑩⑪の2語は「限界性がない」多量を表す。人に物を勧めるとき、遠慮しなくても良いという気持ちを込めて使われることが多い。⑩「ナンボデモ」は「ナンボ」が共通語と異なる語形であることから方言意識が高く、⑪「イクラデモ」は「ナンボ」の共通語形である「イクラ」を含んでいることから上品なことばであると認識される。すなわち、方言語形⑩と共通語形⑪という関係にある。

⑪ナンボデモ

○ウチニャー ナンボデモ アルケ モツテカエツチャッテ エー ヨ。(うちにはいくらでもあるから帰って良いよ。)

⑫イクラデモ

○ダイブ ジョーヒンナ ヒトジャ ネ。(「使うのは」かなり上品な人だね。)

イ 数量「少」をあらわす語彙

① チート

○チートシカ ナー。(少ししかない。)

○カキヤー エツト ナランカッタ。チートシカ トレンカッタ。(柿はたくさんできなかつた。少ししかとれなかつた。)

数量副詞ではなく、「コマイ」「アツイ」などの形容詞を修飾する程度副詞としての用法もある。

○チート コモーシテ モラオーカ。(「ストーブの火を」少し小さくしてもらおうか。)

○チート アツイ。(少し暑い。)

②チョット

③チビット

これらも、少量を表す。一方、④⑤⑥の3語は、さらに少量を表す語である。

④チョボット

○モー チョボット シオー イレテ。(もう少し塩を入れて。)

⑤チョッピリ

⑥メクソホド

○メクソホドナラ アル ヨ。(ほんの少しならあるよ。)

④の塩の量の文例からも、非常に小さい量であることがわかる。料理に入れる塩の量は指でつまんだ量(ひとつつまみ)など、それほど多い量ではない。話者の意識として、「チート」などよりももっと少量、共通語では「ほんの少し」に相当する語が④⑤⑥である。⑥の文例でも、人に何かを貸してほしいといわれ、「ほんの少しだけでも」と謙遜の気持ちを込めて使っている。

IV. 吉舎方言の数量副詞語彙の体系

IIIで示した、吉舎方言として得られた数量副詞語彙の体系を示すと、次のようになる。

まず、数量が多いことを表す語彙である。

A より多いことを表す語

A1 限界性がない ⑪ナンボデモ ⑫イクラデモ

A2 多量の強調 ③ヨーケ ⑩バクダイ

B 多いことを表す語

B1 抽象度が高い

①ギョーサン ②ヨケー ④エット ⑤イツパイ

⑥タクサン ⑦タイソー

↑ 抽象度があがる

B2 対象物が限定される語(文脈に制限)

飲食の量に限定 ⑧タラフク

山積みのできるもの ⑨ヤマホド

次に、数量が少ないことを表す語彙である。

C 少ないことを表す語

①チート ②チョット ③チョビット

D より少ないことを表す語

④チョボット ⑤チョッピリ ⑥メクソホド

論理的には数量が多いことと少ないことは対照的であるが、語彙体系をみると、必ずしも対照的ではないことがわかる。

語彙量の比較では、多いことを表す語が12語、少ないことを表す語は6語であり、多いことを表す語の方が2倍の語彙量を持つ。

さらに、対象物に制限がある語というB2のカテゴリーは、数量が少ないことを表す語彙には見られない特徴である。限界性を感じさせないような多量、より多量(多量の強調)などのカテゴリーも設定できた。数量が多いことは、「多い」のか「より多い」のかという量的側面への注目に加え、対象物の制限にみられるような、質的側面への注目もなされている。

反対に、数量の少ないことを表す語は、分量の少なさで2段階に分けるのみである。対象物に制限があるような語はなく、数量が多いことを表す語彙と比べ、単純であるといえる。数量が少ないことは、その量的側面において注目されているということであろう。

ところで、「多い」「少ない」の強調である「より多い」「より少ない」のカテゴリーでも、「より多いことを表す」語彙では限界性のなさという比況性(A1)と単なる強調(A2)の使い分けがあった。「より少ないことを表す」語彙にはこのような質的な使い分けは見られない。この点において、数量が多い方向の語彙における、質的側面への注目を指摘することができる。ただ、「数量が少ないことを表す」語彙では、全体の語数は少ないものの、6語のうち半数が「より少ないこと」を表していることに注目したい。数量が多いことを表す語彙では、12語のうち4語が「より多いこと」を表す語であり、語彙量の比率は「多いこと」2に対して「より多いこと」1となっている。つまり、「より多いこと」は相対的に軽い。「より多いこと」はごく限られた状況下において使用されるカテゴリーであると思われる。

最後に当該地点の数量副詞語彙の体系についてまとめる。

数量が多いことと少ないことは、非対称的である。語彙量の大きさ、体系の複雑さ(カテゴリーの多さ)ともに、数量が多いことの方が大きく、複雑である。

次に、数量が多いことには、量的側面に加え、質的側面でも語の使い分けがあると思われる。数量が少ないことは量的側面にしか使い分けがない。

これらのことは、人々が数量が多いことを多様にとらえ分けている、すなわち、興味関心が数量の多いことに向いていると仮説することができよう。

また、数量のとらえ方についてみると、「多いこと」と「より多いこと」では「多いこと」の語彙量が大きく優勢であるものの、「少ないこと」と「より少ないこと」は同じ比率となる。量的側面において、数量が「より多いこと」と「より少ないこと」の間には質的な差があるといえよう。

一方で、疑問も残る。数量が多いことを表す語彙のB1カテゴリーは、抽象度の高い語であった。6語が所属するが、同じことを表すために、なぜこれだけの語が必要

なのだろうか。程度を強める方向の語彙には、表現価値の低下による新語の発生が起りやすいことの一つの例であると思われる。そのとき、最も簡単に起こると思われるのは、近隣からの新語形の導入である。Vでは『中国地方五県言語地図』との比較を通して、当該地域を中心としてみた数量副詞語彙の動態を把握したい。

V. 数量が多いことを表す語の分布と動態

数量が多いことを表す語は、共通語で「たくさん」が見出し語となる。この「たくさん」を表す方言語彙の広島県内の分布をとらえようとしたとき、「たくさん」が項目に取り上げられている言語地図は多くない。藤原与一『瀬戸内海言語図巻』、廣戸惇『中国地方五県言語地図』などが候補となる。しかし、『瀬戸内海言語図巻』は内陸部のデータが無く、『中国地方五県言語地図』は島嶼部のデータが無い。いずれも一長一短であるが、広島県北部地域まで広くカバーするためには『中国地方五県言語地図』で把握するのが最適であると考えられる。なお、『中国地方五県言語地図』ではFig. 355の(A)から(F)図までの6枚の地図を用いて五十音別別に示される。広島県の地点番号52が、吉舎町絵である。

Fig. 355の(A)から(F)図から明らかになる吉舎方言の「たくさん」を表す語彙は、次のものである。

エット コダクサンニ タント ドエライ
バクダイ (5語)

当該地点の周囲（隣接する地点）にはイカイ、ギョーサン、シゴガナランホド、ドヒョーシも見られる。その外側（さらに隣接する地点）には、アバキガツカンホドもある。

一方、今回の調査で得られた語は次の語である。

イクラデモ イッパイ エット ギョーサン
タイソー タクサン タラフク ナンボデモ
バクダイ ヤマホド ヨーケ ヨケー (12語)

調査の目的が異なるため、単純に比較することはできない。特に、今回の調査で得られたものの『中国地方五県言語地図』に見られない語については、語彙の全体像をとらえようとした本調査と分布を明らかにするための言語地図調査では、後者のほうが精度が低いため、新しい語が発生した、などの結論を得ることは難しい。ただ、『中国地方五県言語地図』の吉舎町周辺の分布状況を考慮に入れることで、語の伝播の可能性についてはおおまかな指摘をすることはできるのではないかと考える。さらに、逆の場合、すなわち、『中国地方五県言語

地図』に見られ、今回の調査で得られなかったものについては、語の消滅を指摘することはできると思われる。

今回の調査と『中国地方五県言語地図』の比較により、以下の4つのパターンに分類した。

A 『中国地方五県言語地図』にあつて今回調査にもあつた語

エット バクダイ

B 『中国地方五県言語地図』にあつて今回調査で得られなかった語

コダクサンニ タント ドエライ

C 『中国地方五県言語地図』の吉舎周辺部（隣接地点、もしくはその隣接地点）にあり、今回調査で得られた語
ギョーサン

D 『中国地方五県言語地図』になく、今回調査で得られた語

イクラデモ イッパイ タイソー タクサン
タラフク ナンボデモ バカニ ヤマホド ヨーケ
ヨケー

Dに分類される語には、「イクラデモ」「ナンボデモ」のように限界性がないことを前提とするたくさん、「タクサン」という共通語形、「バカニ」という強調、「タラフク」「ヤマホド」のように用法が限定されるものなど、いわゆる一般的場面での使用が難しい語が多く含まれている。言語地図の調査項目では一般的な「たくさん」を聞いており、回答が出にくい類の語であるように思われる。

次に、Bに属する語が当該地点ですでに失われた語であると考えられる。『中国地方五県言語地図』にある5語のうち3語が失われたということになり、大きな変化が起こっていると考えられる。先に見たように、「エット」は年寄りが言うことばであると捉えられており、「エット」も失われつつあると思われる。

一方、現在の当該方言で優勢な語は「ギョーサン」「ヨケー」「ヨケー」であった。『中国地方五県言語地図』での「ギョーサン」は、広島県全域に広く分布する。『中国地方五県言語地図』でも吉舎の周辺地点に見られ（先の分類ではCにあたる）、当該地域の「たくさん」にあたる語は「ギョーサン」が代表する方向に変化しているものと思われる。もう一つの「ヨケー」「ヨケー」は、『中国地方五県言語地図』によると広島県南部に広く分布している。「ヨケー」は広島県南部、山口県のほぼ全域に、「ヨケー」は「ヨケー」の分布域に重なり、さらに島根、鳥取、岡山県美作など、山陰にも広く分布する。すなわち、広島県中北部、岡山県備中に分布がなかったこれらの語が吉舎方言で使用されるようになったと考えられ

るのである。伝播のルートとしては山陰からと、瀬戸内海沿岸からの2つの可能性が考えられるものの、二つの語形が併存している状況を考えて、安芸地方南部の状況に近い。瀬戸内海沿岸部から、つまり県庁所在地の広島市の影響を考えないわけにはいかない。

ところで、今回調査で得られなかった「コダクサンニ」「タント」「ドエライ」について考えてみたい。

「コダクサンニ」の分布は、鳥取県を除く中国地方に広く分布するが、よく見ると、出雲と石見東部の海に近い地域と、岡山県、広島県の備後地方と安芸の東部、山口県の全域となる。安芸西部と石見西部には稀な語である。「タント」は美作に優勢で、岡山県の全域、広島市よりも西側を除く全域、石見、出雲の境界付近と山口県の日本海側など、全体的には東側に偏った分布を見せる。

「ドエライ」は美作の一部を除く岡山県、鳥取県倉吉付近、備後東部に分布する他、広島県の太田川流域にいくつか見られる程度である。岡山を中心とした東側に集中してみられる語であり、吉舎の「ドエライ」は、「ドエライ」のまとまった分布域の西の最前線にあるといってもよい。

以上をまとめると、『中国地方五県言語地図』にあって今回の調査で得られなかった3語は、吉舎という地域を中心にしてみた場合、その東側に広く分布する語である。当該地点において、東側へと連なる語は失われる傾向にあり、代わって、県庁所在地である広島市を中心に分布していた語が拡大しつつある可能性を指摘することができよう。かつては「安芸」と「備後」の2カ国であった広島県で、県庁が広島市に置かれたことによって「備後」というまとまりが希薄になっていることを意味するものであろう。

VI. まとめ

吉舎町方言の数量が多いことを表す語彙と少ないことを表す語彙を比較し、以下のことが明らかになった。

- 1 数量が多いことを表す語は、数量が少ないことを表す語よりも多い。
- 2 数量が多いことを表す語は、「より多い」のか「多い」のかという量的側面に加え、特定文脈でしか用いられない質的側面の二種によって体系化される。一方の数量が少ないことを表す語は、量的側面のみであった。
- 3 以上を併せて考えると、数量が多いことは、土地の人々によって多様に捉えられ、表現されているといえる。

また、数量が多いことを表す語について、約50年前の資料である『中国地方五県言語地図』と比較した。

4 吉舎町から東側に連なって分布する語形は失われる傾向にある

5 一方、県庁所在地の広島市付近に分布していた語が、現在盛んに用いられるようになっている。

程度性の高さ（はなはだしさ）を表す語は、使われていくうちに価値の低下を起し、改変が起こることがある。直ちにこの現象が起こっていると指摘はできないが、当該地域において、県庁所在地である広島市の影響を受けながら数量副詞語彙の改変が起こっていると考えられた。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 25370523 の助成を受けたものである。

文献

- 1 岩城裕之（2009）「方言数量副詞語彙の個人性と社会性」和泉書院
- 2 廣戸惇（1965）「中国地方五県言語地図」風間書房
- 3 藤原与一、広島方言研究所（1974）「瀬戸内海言語図巻 上・下」東京大学出版会